

トラックや牛車のほか、箱詰めされた手りゅう弾や地雷は、同十五年の七月に開通した川越線で、製品が運ばれていました。南古谷地区のほか、市内には霞ヶ関地区（当時は霞ヶ関村）にも軍需工場があり、工場で作られた製品が的場駅から運ばれていました。火薬を扱っているため、工場では何

度か爆発事故が起きました。陶製の手りゅう弾が爆発した事故もありました。黒須（博）さんは事故を覚えていて、「爆発したけれど、大きな被害はありませんでした。戦場で大して役に立たないのでは」と思ったそうです。戦争末期になると、学徒勤労動員の生徒が来ていたようですが、話を伺っ



浅野カーリットについて話を伺った皆さん。左から、神藤長三郎さん、江尻ふささん、黒須静雄さん、黒須博太郎さん

後ろは当時、浅野カーリットの守衛所だった建物です。現在は、神藤さんの家の敷地内にあり、一部改装され事務所として使用しています

た四人は、生徒が来ていたことは知りませんでした。

動員に関しては、霞ヶ関地区の軍需工場にも、福島県から約三十人の女子でい身隊が働きに来ていました。河合敏恵さん（80歳・三光町）はその人たちに、自宅の畑で取れたサツマイモやジャガイモをあげたところ、とても喜ばれたそうです。

戦時中の学校

河合さんは、同十七年に川越高等学校（現在の川越女子高校）を卒業し、第三国民学校（現在の中央小学校）の代用教員として採用されました。

「教員になって一年目の年末に、子どもたちの靴が配給制になりました」と河合さんは、教員生活一年目を話してくれました。

一クラス四十人で、配給が一回に五足くらい。当然、配給されない子どもたちが出てきます。そのため子どもたちはみんな、はだしで過ごすようになりました。校舎の入り口にためた井戸水があり、そこで足を洗って、教室に入りました。冬場の朝礼では、校庭にできた霜が子どもたちの立っていた場所だけ足の熱で解けていた、ということもあったそうです。

靴が配給されるようになったあとで、食べ物も配給制になりました。食料事情が悪くなり、給食のない当時、

昼食を水だけで過ごす子どもたちもいたそうです。そのため、各クラスに栄養補給するための肝油ドロップが置かれていました。

授業は、国語や算数などの教科のほかに、高学年になると、女子はなぎなた、男子は団体訓練などが行われていました。

当時教育の柱となっていたのは、明治二十三年（一八九〇）に明治天皇の名で発布された教育勅語でした。この教育勅語には、戦前の日本における基本理念が明示され、各学校で大切に保管されていました。

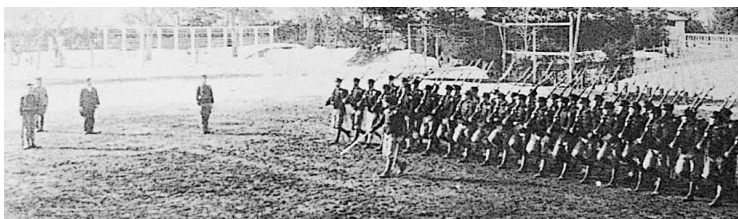
小林勝次郎さん（82歳・通町）は小学校の時に覚えた教育勅語の話をしてくれました。

「朝礼の時に、校長先生が読みあげるのをじっとして聞いていなければいけませんでした。そして、教育勅語を覚えなさいといけませんが、難しいことばで書かれていたので、覚えるのがたいへんでした」。

昭和十八年後半から敵機の襲来を告げる、警戒警報・空襲警報の数が増えってきました。警報が出されるとその時点で授業は中断し、先生が子どもたちに付き添い下校しました。

「警戒警報や空襲警報を気にしながらでしたので、授業に集中できませんでした」と河合さんは振り返ります。

同じころ、第三国民学校の高学年は各学校ごとに割り当てられた干し草の



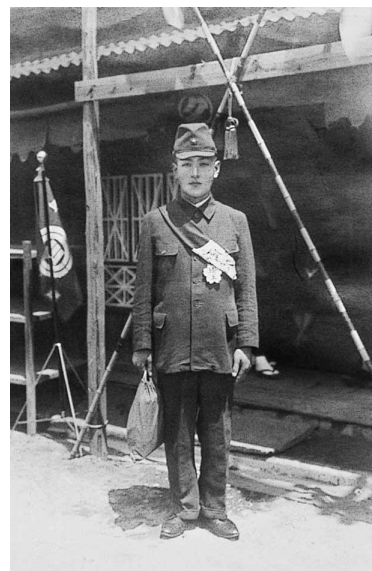
生徒による行進の様子（市立川越高校提供）

そんな時は、「子どもたちを桑畑の茂みの中に隠れさせて、飛行機から見えないようにしました」と河合さん。国家総動員法により、中学生は勤労奉仕を行っていました。戦争末期になると学徒動員として、軍需工場などで働くことになりました。河合さんが女学校にいたときには、勤労奉仕として、伊佐沼周辺に麦刈り、狭山方面に茶摘みに行っていました。河合さんが卒業したあと、校舎内に機械が持ち込まれて、軍需工場のようになり、授業どころではなかったそうです。河合さんのいた第三国民学校では、供出の作業はありませんでしたが、動員はされることなく、授業をすることができました。

川越商業学校（現在の市立川越高校）は、同十九年四月に、国の方針として、川越市立工業学校に名称変更され、電気通信科が置かれました。しかし、入学しても生徒たちは、学徒動員で軍需工場で働く日々を過ごすことになりました。それ以前から授業の中で、教練という軍事訓練が行われ、現役の日本軍将校が担当教師として着任し、授業を担当していました。卒業してから即戦力となるよう、生徒を鍛えていたようです。

戦時中の生活から

太平洋戦争開戦直後、日本は優勢でしたが、ミッドウェー海戦、ガダルカナル島（ソロモン諸島）撤退により、形勢が逆転します。国内でも生命の危険を感じるようになりました。河合さんは、学校での仕事に機銃掃射に遭遇しました。「空襲警報のサイレンが鳴って、周りの物を持って防空こうに向かったところ、目の前の渡り廊下に弾が当たりました。あと少し早かったら命を落としていたでしょうね」と河合さんは振り返りました。その当時、第三国民学校には二つの防空こうがありました。小林さんの自宅の庭にも防空こうがありました。「大体の家では防空こうがあったのではないのでしょうか。うちでは、たんすを防空こうに入れていたことがあります。すよ」と小林さん。



小林さんが海軍入隊前に自宅前で撮った写真（小林勝次郎さん提供）

物が足りない時代ではありましたが、「あまり愚痴などは言いませんでした。欲しがりません勝つまではとか、ぜいたくは敵だ、という教育を受けてきたからでしょうか」と河合さんはしみじみと語っていました。

日常生活に必要な物が配給になり、生活が不自由になっていました。特に米は配給だけでは足りません。そこで、サツマイモやジャガイモを刻んで米といっしょに炊いて、おなかを満たすためのくふうをしていました。小林さんは、ある食堂での経験を話してくれました。「店のメニューに焼きそばがあったのですが、実はめんがヒジキでした。めんは材料となる小麦粉もなかったのです。肉は馬肉、魚も鯉を食べていたと小林さんは教えてくれました。農家は、作物を供出しなければなりません。土地の面積に応じて供出量が決められていました。中には、自分たちの食べる分も収め、それだけでは足りず、購入してまで供出をしていたということもありました。日用品も不足し、河合さんは、自分でげたの鼻緒と足袋を作り、それを履いて仕事に通っていました。

昭和二十年八月十五日

同二十年三月十日、東京大空襲で東京は一面の焼け野原になりました。その時、川越から東京方面の空が明るくなっているのが見えたそうです。

それから五か月後の八月十四日、空襲警報が市内に鳴り響きました。攻撃対象は川越ではなく、熊谷市でした。そして、次は川越ではないか、といううわさが流れる中、翌日を迎えました。